革命の秋（トキ）

愛宕無

青い青い地球が誕生してから四億四千年。神様のいたずらで作られたこの世界に原生生物が誕生し、恐竜などの大型生物が闊歩する時代に突入した。そして、恐竜など絶滅し、約四百五十年前に人類が誕生した。この頃は身分社会などなかったのだが、農耕を始めてから支配するものされるものといった身分制度が確立していった。そして、近世ヨーロッパ――イエス・キリストの教えの名のもとに、都合のいいように教えを解釈してきた。その結果、身分格差が更に広がっていった。一部の特権階級と王権貴族に搾取され、支配された世界。そこからあぶれた者は、権利などなく、働く義務しか与えられない。

奴隷のように働くもの、それをこき使う商人や町人など、そしてその上に君臨する特権階級や王権貴族、そして王。そのよう絶対王政的な身分制度の中で、上のものにつき従うしかなかった。

イギリス、ブリストル。ロンドンから西方にある都市。ロンドン、ヨーク、ノリッジに次ぐ都市である。エイボン川に沿ってあるこの都市はブリストル海峡に接している水産資産に富んでいる。そこにある、エインズワース家。特権階級の貴族であり、このブリストルで絶大な権力を持つ名家である。豊かな水産資源のあるこの都市では王宮への魚介類、野菜などの農産物を送っている。

エインズワース家の四男坊、クレステッドは本の虫だ。起きている間は、ほとんどの時間を手に本を持ち、本を読んでいる。四男ということで、家を継ぐ可能性はないに乏しく、勉強や王宮剣術などの武道なども免除されている。というよりも、期待されていないだけである。クレステッドの両親も最初は兄たちと同じようにそれらを教えられていたが、いくらやっても上達の兆しが見られなかった。国文学を除いてだ。そこの部分だけでも強化しようと、両親はクレステッドに本を与え続けた。それは、本から知識を得ることを、勉強に代わると考えたからだ。その結果はでた。家庭教師に教えを乞うていた兄たちよりも、深く、幅広い知識を持ち合わせるようになった。

クレステッドは、二十代半ばに差し掛かった時、家にある本だけでは満足がいかなくなった。

そのうちに外出する機会を得た。冬の寒さが肌を刺す日だった。衛兵のスキを見て、クレステッドは逃げるようにその場を去り、町にある本屋へと足を運んだ。

金属のとっては手袋越しでもひんやりと感じ、そしてスッ、ギギーっと木製ドアを押し開いた。すると中からカビ臭いにおいとともに古書の独特のにおいがした。そのにおいにクレステッドは寒さを忘れ、温かく、胸が高まる想いがした。

今までに与えてもらった本だけでなく、古書との出会い。家に帰ってから叱られたことよりも、それらとの出会いのほうが大きかった。

クレステッドはそれから、暇な時間ができれば外へと繰り出し、その本屋へと足を運ぶようになっていった。

それから半年が過ぎ、そのうち本屋の店主とも話をする機会も増え、また町の現状を知ることとなる。現実は本で読んだものとは違い、商人たちによって奴隷のようにこき使われている人々。飢えに苦しみ道端で倒れ、その人々に手を差し伸べる人がいないという現状。クレステッドは、そのような現状を目の当たりにした。

また、農民たちが育てたコムギが黄金色に輝き、家の中ではけっして見ることのできない素晴らしい光景が目の前に広がっていた。クレステッドは心惹かれ、感動を覚えた。

だからこそ、クレステッドは、徐々にその現状に違和感を覚えていたこのような素晴らしい世界を作り出す人々が虐げられ、何もしていない人々が豊かに暮らす世界。そのような世界に何ごとも感じることなく暮らしてきた己を恥じた。

自分の想像してきた世界とは違った。キリストの教えの通りに書かれていた本の世界とは違った。自分がなんなのか。自分たちはなんなのか。領主とはなんなのか。頭の中の世界がゲシュタルト崩壊を犯していく。

「君にはこの店の裏を見せられる」

店主はクレステッドを店の奥、そして地下へと続く階段へといざなった。

そこにあったのは、キリストの教えと反している、キリスト批判をしている禁書が所狭しと並べられていた。クレステッドは近くにあった本を一冊手に取る。そこに書かれていたのは、農民の暮らしの不安をつづったものであった。朝から晩まで働きづめで、収穫したものの半分以上を税金として納める。そして、一日一日の生活もままならない。苦しい生活を強いられている。特権階級の不満を吐露し、しかしそれをぶちまける手段がない。クレステッドは、その本を通じて最下層の人々の生活の現状を知り、気持を知った。

毎日のように本屋へと通い、全ての本を読みつくした時には、一年と幾日の歳月が過ぎていた。

すべての本を読み終えたその日、クレステッドは姿をくらました。コムギが発芽し始めた春のことだった。

秋――黄金色に輝くコムギを収穫し終え、新しくコムギを植え、次の収穫に備える季節。しかし、その年のブリストルではその光景が見られなかった。

クレステッドが姿をくらましてから一年と半年が過ぎたある日、エインズワースの邸宅の周囲を農民や奴隷、さらには町人や下級商人が囲っていた。手には、農具やら剣やらの武器を持ちだ。

そして、ものの数時間でエインズワース家の家人や使用人は皆、処刑という名のもとに

殺害された。そして、その火花は広がっていき、ブリストルに住む貴族たちへと飛び火していった。
そして、実質ブリストルを支配していた貴族たちは駆逐され、ブリストルの街は反乱市民たちによって支配されていた。
そして、その中心にいたのはクレステッドだった。
「「クレステッド……クレステッド……クレステッド……」」
クレステッドを囲む、反乱市民たちは口々に名を叫び、鳴りやむことを知らない。
バッと。クレステッドは右腕を高く掲げる。すると、革命市民たちは鎮まる。それを、確認し、高らかに宣言する。
「革命のトキだ」
と。